

---

# 殺し屋と身体異変者

HERON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

殺し屋と身体異変者

### 【Nコード】

N2011D

### 【作者名】

HERON

### 【あらすじ】

生まれたときから殺し屋として育てられた青年と、ある、身体に出る異変以外は普通の女性が出会ったとき、物語は始まる。

## story1。殺し屋と身体異変者の出会い

太陽も隠れ、月が照らす明かりしかない時間に、深き森の中に三人の人間が見える。

三人の人間は、深き森を出て、見るからに廃墟と言うような場所に出た。

廃墟の前で三人の人間は動きを止めた。動きを止めた三人の人間の一人が言葉を発する。

「ここだよ……ここに化け物がいるのさ……でも、あんたなら大丈夫さ。報酬は弾むから頼んだよ……」

「任せてください。でも、人間は栄養を摂らないと生きれない生物だと父から教えられています。僕が行かなくてもいずれ死ぬのではないのでしょうか？」

「それは違うんだ。クレスト君に言ったとおり、私たちの娘は、身体異変により凶暴な生物へと変身してしまう。この森には動物の気配すらあまり感じられなかっただろう？ それは、私たちの娘が凶暴な生物になったときに食べているんだろう。そして、この森に動物が生存しなくなると、きっと我々人間を襲うに違いない。だから、その前に殺さなければならぬのだよ」

年は40くらいと思われるターゲットの親らしき二人が、クレストと言う、若き殺し屋に自らの子どもを殺してくれと依頼する。まったく奇妙な話だ。

クレストは、納得したのかしてないのかわからない表情で頷き、

拳銃の弾丸を込め、廃墟へと歩き出した。

廃墟へと歩く後ろでは、二人が祈るようにして手を合わせている。

クレストは廃墟の中に入った。

中は、見たことも無いような虫がウジャウジャしているような場所、特に調べる場所なども無く、階段の上にある一つの部屋以外部屋が見あたらなかった。

クレストは、足音をたてないように歩きながら、階段の上にあるドアの前まで辿り着いた。

クレストは、ドアの前に銃を突きつけながら、ドアを気づかれないう程度に少し開け、カプセルのような小さい物をドアの隙間から部屋に投げた。

投げたカプセルから煙幕が発生し、部屋一面を覆い尽くす。

その隙を狙い、クレストは一気に部屋に突入した。

突入したのはいいが、クレストに銃を撃つ気はないらしく、構えるポーズだけとっていた。

そして、煙が晴れると目の前には、若い女性の姿があった。やはり、廃墟への監禁生活のせい、少し痩せている。

「僕は君を始末してくれという依頼を受けている。早速だけど死んでくれ」

そう言うクレストは、何も躊躇わずに銃の引き金を引こうとしたが、なぜか、引き金を引く手を止めた。クレストは、とても驚いた表情をしている。

「なんで、脅えた表情をしていないの？　なんで、ガタガタ震えな

がら涙を流さないの？ 父は言ってた……人は、死ぬときは必ず脅えるものだって……この世で一番怖いものは死なんだって……」

無抵抗の女性の前で、銃を突きつけて引き金を引こうとしている殺し屋がガタガタ震えている。なんとも奇妙な状況である。

そして、ずっと無抵抗で黙っていた女性が、静かに口を開く。

「私を殺すのを依頼したのって、私のパパとママでしょ？」

「そうだけど……それがどうしたって言うの……？」

殺し屋は本来、依頼者の名を明かしてはいけない義務があるのだが、この時ばかりは、焦って喋ってしまっている。それだけ動揺しているということだ。

「じゃあ、早く殺して……だって……生きてたってもう意味ないもの……私は、この体のせいで、友達からも親からも望まれない存在になった。この際だから教えてあげる。この世で一番怖いものは死ぬことなんかじゃないわ。私を必要としてくれる人が居なくなったときよ。誰からも望まれなきゃ、生きてても意味ないじゃない……  
…っっ！…」

そのとき、女性の体に異変が起こった。目が真っ赤に充血し、気が狂ったような息の仕方をしている。口からは唾液が飛び散り、牙のようなものも生えてきた。

「はや……早く引き金を引きなさい……早く私を殺すのよ……私の理性が……早く……早くしなさい……あんた……死んじゃうわよ？  
……早く……早くしなさい……」

女性は、最後の力を振り絞るようにして声を出した。

それでもクレストは引き金を引くことは出来なかった。女性の変貌もあるが、それよりも、死を怖がらない人がいる事に対し、混乱しているのだ……それほどまでに、クレストの父の言葉は、クレストにとって凄い効果のあるものである。

その間にも、女性の体は、変貌していく。鋭そうな長い牙が生え、目は驚くほどに充血し、目つきも鋭くなり、手から伸びる爪は、刃物のように大きく尖っている。息も、獣のように大きく呼吸している。

「それ……それでも殺し……なの？ ……最後の手……断よ……私の体の変貌した……ら……私の唇に口付け……しな……さい……わかつ……わね……」

女性は、そう言う意識が飛ぶように倒れた。その数秒後の事である。人間とは思えないような叫び声を上げて立ち上がった。

その叫び声に、ガタガタ震えたままだったクレストも流石に反応した。

クレストは、少し女性から間合いをおいた。

しかし、そんなことも構わずに変貌した女性はクレストに襲い掛かる。

クレストはそれを紙一重でかわす。女性のスピードは尋常じゃなかった。それをかわすクレストは、やはり戦闘能力は超一流なのである。

しかし、かわしてもかわしても、女性は、問答無用にクレストに襲い掛かる。

その時、クレストはかわそうとしなかった。

女性の獣のような大きな爪を肩に受け、血を流しながら女性を引き寄せ口付けをした。

あのスピードを冷静に捉え、更に引き寄せ口付けをする。これも、クレストしか出来ない芸当であろう。

口付けをすると、変貌した女性は、ヘナヘナと倒れ、少しすると女性が起き上がった。

「どうやら成功したみたいね。さあ、これで心置きなく殺せるでしょ？ 早く殺して！」

女性は、自らの手でクレストの持っている拳銃を心臓に突き付けた。

「駄目だ。僕は君を殺せない」

いきなりのクレストの言葉に女性は驚いた。

「な……何を言っているの……？ あなた殺し屋でしょ？ 殺し屋が人を殺せないでどうするのよ！！ どうせ、私なんか死んだって迷惑かける人なんかいない……ううん。むしろ感謝されるのよ。だから、私を殺してよ……私なんか存在してるだけで邪魔者なのよ！？」

女性は、叫ぶようにクレストに言葉をぶつけた。

「駄目だ。出来ない」

「どうして！？」

「それは、僕が君に興味を持ってしまったからさ。君は、僕の知らないことを沢山知っている。それじゃ理由にならないかな？」

「でも……私は、誰からも望まれない人間なのよ……私といるだけできつとあなたまで狙われるかもしれないのよ？」

必死で言葉を発する女性の肩に、クレストは手を置いて言葉を発した。

「誰からも望まれていないわけじゃないよ。少なくとも僕は今、君を必要としている。それに、みんな君が怖いんじゃない。君の体の異変を怖がってるんだ。君は、この廃墟に誰かに入れられたのかい？」

「違うわ……私の意志でこの廃墟に来たのよ。ここなら誰にも被害は出ないんじゃないかと思って……動物には被害だしちゃってるけど……」

女性は、さっきの勢いは嘘のように照れながら答えた。

「だろ？ 君はとても心が綺麗な女性じゃないか。大丈夫。君の变化は口付けすれば治まるんでしょ？ なら大丈夫。僕がいる。僕が絶対に君の異変を治して見せる。だから、行こう？ もう、君の親も逃げているところだろうしね。あつ。そうそう。僕の名前は、クレスト・オルブライト。よろしく」

クレストは女性に手を差し出した。

「そ……そうね。わかった。私はクレストに着いていくわ。でも、



後悔させてしまうと思う……それは先に謝っとくね……ごめん……  
あっ！ 私の名前も言わなくちゃね。私は、アリーナ・ハーネット。  
よろしく」

アリーナはクレストの手をがっしりと握った。

「決定だね。とりあえず、僕の家へ行こう。それと、僕は後悔しないよ。自分から誘っという後悔なんてしない。約束するよ」

「そう？ 余計なお世話だったかしら？ でも、あり……とね」

「ん？ 最後の言葉聞き取れなかったなあ？ なんて言ったの？」

「どうでもいいじゃないそんなこと！ じゃあ、お邪魔させてもらうわ」

こうして二人は出会った。向かう場所はクレストの家。だが、このままアリーナの親が黙っているとは思えない……この先どうなっていくのだろうか……

## story2。殺すということ

二人は森を出て、森より少し先にあったクレストの車に乗り、クレストの家へ向かった。

二人は特に何も話すことなく、クレストの家へ淡々と進む。

だが、五時間ほど時間が過ぎた頃。ある異変に気づいたアリーナは、すかさずクレストに質問した。

「ねえクレスト？ どんどん町から離れてない！？ ここ……森よ……？ この森を越えた先に町があるのかしら……それなら話は分かるけど、随分遠くから来たのね……」

その言葉に、運転していたクレストは、前を向いたまま静かに口を開いた。

「それは違うよ。この森の中に家があるんだ」

「えっ！？ じゃあ、私が住んでたとことあまり変化ないじゃない。電気とかどうするのよ？ 町の大きい家に住めるくらいお金もあるんでしょ？」

「電力はちゃんと届いてるよ。父がバックアップしてくれてるからね。僕は殺し屋だから、目立つところに家を建てちゃいけないんだ。常に隠密行動さ。でも大丈夫。生活の支障はないから安心しなよ」

アリーナは、「へえ……そうなんだ」といい、それ以上の追求をしなかった。

クレストの目が、家の話題になってからなんだかとても恐ろしく

感じたからだ。特に、父という単語が出たときに……

そして、15分程度車を走らせた所に一軒の家があった。  
見た目は思ったより平凡で何の仕掛けもありそうもない家だった。

「着いたよ。ここが僕の家だ。結構、住めそうな家だろ？」

「そうね。ちょっと安心したわ。中へ入ってもいいかしら？」

クレストは静かに頷くと、家の鍵を開けた。鍵はパスワード式になっており、暗号を入力しなければ入れないタイプの鍵だ。家の割りに高価そうな物なので、明らかに浮いている。

二人は家の中へ入った。

家の中も普通なのだが、なぜかとても広く感じる。いや……当た  
り前か……

TVも無ければダンスも無い。ある物といえば、冷蔵庫・キッチン・机・明らかに浮いて見える金庫くらいだ。

「あつ……あんたねえ……TVも本も音楽も無しでよく暇にならな  
いわね……思えば、服とかどうしてんのよ……」

「父が送ってきてくれるから洗濯もいらなんだよ。父に、世間の  
情報が見れるTVがあると、いらぬ情が発生し、殺すときに判断  
が鈍るから見るなと言われてるしね」

少し沈黙が続いた。沈黙の後、アリーナは、急に覚悟を決めたよ  
うな表情になり口を開いた。

「さっきから思ってたんだけど、話すことのほとんどに父が関わっ

てるわね？ そんなに父の命令は絶対なの？」

その言葉を聞いたクレストは、なぜか座り込んで笑い始めた。

「な……何笑ってんのよ！ 笑い事じゃないのよ！」

アリーナは当然、怒り口調になる。

「ごめんごめん。確かにそうだなあって思ってたさ。確かに僕は父の操り人形だね。自分でもそう思うよ。でも、最近は、殺し屋という職業に疲れてきたんだ……」

クレストは、なんだか哀しい目をしていた。

「なら、辞めりゃいいんじゃない？ そりゃ、私もそんな強いこと言えないけどさあ……あんたの父も、今の仕事を嫌がってる息子に強制して仕事続けさせたりしないんじゃないかなあ。親って、いつもはただ自分達の子どもにガミガミ言っても、自分達の子どものことを第一に考えるもんなんでしょ？ 親子ってそういうもんじゃないのかなあって私思うよ。親に狙われてる私が言う台詞じゃないと思うけど……」

アリーナが、珍しく優しい口調になった。

その言葉を聞いたクレストは、静かに立ち上がってアリーナの方へ振り向いた。

「僕ね。この世に生まれて……自力で立てるようになってすぐに殺し屋としての技術を叩き込まれたよ。初めは嫌だったさ。拳銃を持つのも怖かった。でも、父にずっと、犯罪者・凶悪犯……人に害を

与えたものを殺して悪いことなんて一つも無い。そう教えられてきたよ。ついには感覚も麻痺したのか、犯罪者を何人も何人も完璧に殺していく父に憧れるようになってた。僕も、何回も何回も犯罪者を殺す中で、拳銃を持つことに……人の命を奪うことに何の抵抗もなくなってた。でもね、最近になってそんな自分が怖くなってきたんだ。殺すことに抵抗の無い自分にね……殺すって事は、命を奪うってこと。当然。犯罪者からの被害を受けた家族は悲しんでる。僕が、その犯罪者の命を奪うことで、犯罪者の一生を奪い、犯罪者の家族だって、やっぱり、自分の子どもが死ぬことで悲しむ。僕には耐えられなくなってきた。殺し屋って職業で救われる人なんていないんだ……依頼人だって、本気で喜ぶ人なんていないしね……ハハッ……何言ってるんだろね僕。こんな重い空気になってる場合じゃないや。気分直しにお茶でも入れてくるよ」

クレストはそう言うとお茶を入りに冷蔵庫に向かい足を進め始めた。

「その気持ち、そっくりそのままぶつけてきなよ」

「えっ？」

アリーナの突然の言葉に、クレストは足を止めた。

「それがあなたのほんとの気持ちなんでしょ？　じゃあ、それを父に言えればいいじゃん。話し合いだよ。親が絶対じゃないんだからさ。話し合うことで見えてくる事だってあるよ。それも家族として大事なことだと思う。それにさあ。私から見ても殺し屋に向いてないよあなた。優しいすぎるわ。言ってきたなよ父のとき。ドーンと胸張ってさ！」

アリーナはなんだか嬉しそうだった。自分に本音を話してくれたからなのだろうか……

クレストは、冷蔵庫に向かうのをやめ、また同じ道に戻ってきた。そして、静かに口を開いた。

「君の言うとおりだね。ここで逃げちゃ、一生辛いまま生きることになるのは目にみえてるよ。分かった行ってくるよ。でも、君も一緒にね。僕の留守中に刺客に狙われたら大変だ」

「いや、ここに残るよ。邪魔になるしね。大丈夫。いざとなったら変身しちゃうから！」

「そう。じゃあ、安心して行ってくるよ。留守番よろしくね」

「うん。じっくり話し合ってきたな」

そして、クレストは家から出て行った。

だがこの後、アリーナの身が危険にさらされることをまだ誰も知らない……

### story 3。事件は突然に……

クレストが家を出てから数分後の事。突如事件は起こる……

アリーナがクレストのために料理を作ろうとしたとき、チャイムが家中に鳴り響いた。

アリーナは、警戒しつつも少しドアを開けた。

「こんな森の中にある家に何の御用でしょうか？」

アリーナは、恐る恐る、ドアの向こう先にいる人物に質問した。だが、返答が返ってこない。だが、ドアの向こう先に誰がいるのは確実なのだ。

アリーナは、もう一度同じ質問を、さっきより大きな声で質問しようとして声を出そうとした。

その時である……

少し開いたドアの間から銃口が覗き込んでいた。アリーナは驚き声を出すのをやめた。

「誰！？ あんたもパパとママが仕向けた殺し屋！？」

アリーナが、そう質問すると、ようやくドアの向こう先にいる人物が声を発した。

「ご名答。だが、俺は君を殺す気など全くない。だから、ドアを開ける。開けなければ、今すぐ君を殺すだけだがな」

「わかったわよ……」

アリーナはドアを開け、その男を家の中へ入れた。  
その男は、家に入った後もアリーナに銃口を突きつけたままだった。

そんな状況の中で、アリーナはその男に質問を問いかけた。

「あんた……パパとママからの依頼で私を殺しに来たんでしょ？  
なら、なんで今すぐ殺さないの？ 今なら私を殺すのは簡単よ。変身しそうな感じでもないしね……家の中へ入れてやったんだからこれくらい話してくれてもいいでしょ？」

その男は、多少沈黙した後、重く口を開いた。

「形上ではそうだ……君の親から依頼され、君を殺しに来た……だが、そんなことは俺からしたら重要な事じゃない。俺の目的はクレスト。君は、クレストの怒りを引き出すための図。これくらいしか言えないな」

場に沈黙の重い空気が流れた。アリーナはこのままじゃいけないと考え、更に質問しようとしたその時である。突如、クレストを狙う男の携帯が鳴った。

クレストを狙う男は、銃口をアリーナに突きつけたまま電話に出た。

淡々と話をしている中で「この話は無かった事にさせてもらおう」などという言葉が出てきたところを見ると、電話の相手は、依頼者のアリーナの親のようである。

少し時間がたち、クレストを狙う男が電話を切った。  
すかさず、アリーナが質問する。



「今のって私の親からの電話？」

「ああ……今ので俺が君を狙った犯行じゃないのは分かっただろう？ だから待とうじゃないか。クレストを」

クレストを狙う男が笑顔で答えを返した。だが、顔は笑顔でも、目は全く笑っていないかった……

「ええ……でも、待つてる間に私が变身しちゃったらどうするの？ その事はどうせ、私の親から聞いてるんでしょ？ なら、待つてる間に变身しちゃうかもよ」

「そのときは、变身する前に君の頭を打ち抜けばしまいさ。そうだろう？」

「ええ……確かにそうね……」

えらく淡々と返事を返してきたこの男に、アリーナは少し恐怖を感じた。

クレストは、この出来事をまだ知らない……

#### story 4。殺し屋として……

アリーナが大変な事態になっている時、クレストは父のいる組織の本部の前へ来ていた。

クレストは一度大きく深呼吸をすると、大きな覚悟を決めた顔つきで本部の中へと足を進めた。

中へ入ると、すぐにクレストの父の部下らしき人物がクレストの前へ現れた。

出てきた瞬間はいばったような態度だったが、本部に入ってきた人物がクレストの父の息子だと分かると、態度を変えた。

クレストは、その場を適当に対処し何事もなかったかのように父のいる部屋まで足を進め、立ち止まりもう一度大きく深呼吸をしてドアを開けた……

そこには、真剣な顔つきでクレストを見つめているクレストの父がいた。

「よお。ようやく来たか息子」

クレストはその言葉に動揺を隠せなかった。それもそのはずである。どちらかというとビックリするのは父のほうだ。息子のクレストがいきなり来たのだから……だが、父に動揺など一切ない。逆にクレストが来るのを分かっていたようだった……

「まるで僕がここに来るのが分かっていたような言い草ですね。でも、今はそんなことはどうでもいい。とても聞いてもらいたいことがあるんですよ」

クレストは、動揺を無理やり抑え込み、様々な聞きたい事を心に封じ込め、あくまで自分の言いにくた事を主張する。色んな事を聞いてしまうと、ペースに吞まれてしまっただろうから……

「わざわざお前の口から聞くことでもねえさ。殺し屋辞めたいんだろ？ これのおかげで全て知ってんだよ」

「こ……これは盗聴器……」

父は、ボロボロに壊れた盗聴器をクレストの前に出した。クレストも、これには動揺を隠そうにも隠せなかった。そんなクレストを見て、父は、不適に笑った。

「見ての通りその通りだ。まあ、もう必要ないと思い、お前の決意を聞いたときに壊してしまったが……でもよ。本当にお前は甘いよ。子どもの頃から俺の無茶な教え込みに文句の一つも付けずに俺が言うこと全て聞きやがってよ。だから俺が盗聴器を仕掛けたことにも気づきもしねんだ。なんせ、俺が言うことは絶対だからな。俺を信頼しすぎなんだ。俺は殺し屋だ。人を殺すし騙す。それが息子であつてもな」

淡々と話す父をクレストが止めた。

「あなたが言いたいことは分かります……でも、今はそんな話を聞きに来てるわけじゃない。それは……」

色々な感情を込めて喋っているクレストを今度は父が止めた。

「待てや。俺の話はまだ終わってねえ。俺だって別に深い意味があつて盗聴器を仕掛けたわけじゃねえのさ。いつか笑い話にでもなる

と思つてな。そんな軽い気持ちで仕掛けた。

どうせ、一人になつても俺といたときと同じ。心を持たないロボットのようにな務を遂行していくと思つたさ。でも違つたよな。時々、一人でブツブツと自分の心の内に秘める苦悩をぶちまけてたりよお。一人で気味悪く笑う練習とかしてたろ？ 笑い声聞こえてきたぞ。そーういや、ティッシュを取るような音とかしてたりもしたな。その後、所々で気味悪い声もだしてたよな？ ありや自慰か？ そんなお前の日常を盗聴してる内によお。俺は殺し屋としてじゃなく、お前の親としての俺として嬉しさを隠せなかつたよ。ずっと俺の言うことだけ聞く、心を持たないロボットがよお、人間になろうとしてんだよ。そんで、決め手があのどこから連れてきたのかも知らねえ女だ。あの女の後押しでお前に心が生まれた。もう、そんなときには決まつてたよこつなるのはな……」

父はそう言つと、机の引き出しの中から一丁の拳銃と、何か書いてある紙を取り出し、クレストにその拳銃を投げた。

「息子。そいつを使って俺を撃て、自らの手で俺の束縛を解き放て。俺が死んだその後は、この遺書の通りにすればお前は捕まらずに晴れて自由のみだ。さあ、引き金を引け。これでお前はもう……殺し屋という名の呪縛に追われなくて済むんだぜ？」

クレストは、その言葉を聞いた直後に、拳銃の安全装置を外し、父の額に銃口を向けた。

だが、クレストは中々父に向けて引き金を引くことが出来ない。クレストの額からは冷や汗が流れ、手も震えている。

しばらくして、クレストが手を下ろし拳銃を捨てた。

「違つ………何かが違う！ 僕があなたを殺しても僕は殺し屋としての呪縛が解かれるわけじゃない……」

その瞬間。父がクレストの頬を思いつきり拳で殴った。殴られたクレストは吹っ飛び倒れた。

そして父は、倒れたクレストの胸倉を思いつきりつかんで無理やり立たせた。

「何奇麗事ぬかしてやがる！？ 俺を殺しても呪縛が解かれるわけじゃないだ！？ お前はただ俺を殺したくないだけじゃねえか。お前はまだ尊敬しちまってんだよ殺し屋の俺をな。そんなことで殺し屋から逃げられると思うか？ いや、無理だね。確実にだ。殺し屋を辞めるってのはそんな簡単なことじゃねえ。だから俺を殺せ。お前が尊敬する殺し屋の俺をな。自ら自分の目標を絶て！ 殺し屋っていう仕事に絶望を感じる！ 絶望を感じる……それで初めてまた立ち上がれんだよ……息子……俺という呪縛を早く解き放ちやがれ……」

父がそう叫ぶと、クレストは黙って地面に転がってある拳銃を拾った。そして、また銃口を父の額に向けた。

だが、さつきと全く目の色が違っている。悲しみの目とそれを取り越えるための決意の目が目の奥で戦っているようにも見えた。しばらくすると、クレストの目は決意の目になっていた。

「確かに俺はあなたを尊敬しています。今もそうです……ずっとそうだと思ってました。でも、今日で僕はあなたから離れます。さよなら僕の目標。僕の父……」

クレストは、静かに引き金を引いた。銃口から放たれる弾丸は、正確に父の額を撃ち抜く。

父はそのまま地面に崩れるように倒れた。だがおかしい。撃ち抜かれたはずの父の額から血が一つも流れていないのだ。それに、撃

ち抜いたはずの弾丸も地面に転がっている。

「ち……違う！ この銃弾は本物じゃない！」

クレストが驚いていると、父が笑いながら立ち上がった。

そして、地面に落ちている銃弾をクレストの方へ放り投げた。

「よく見てみる。重さも形も色も全て本物の銃弾と同じだが、軟らかい材質のものを使ってるから死ぬわけないだろうがよ」

少しの沈黙の後、何かやりきれない感情がクレストを襲った。そして次第に、クレストに怒りの感情が襲ってきた。その勢いで父に飛び掛ろうとしたその時、父が言葉を発した。

「まあ。お前が怒る気持ちは分かるわ。お前が滅茶苦茶悩んで苦悩して決断した二つの選択肢の中に、俺は笑顔で三つ目の回答を選んだんだからな。でもよお。それは違うんだよな。お前は間違いなく俺を殺したよ。もう、お前の中に殺し屋としての俺はいない。今ここにいるのはお前の親としての俺だ。そんな俺から言える言葉はただ一つ。幸せに生きる。これしかない。もうお前は自由だ。恋愛でも就職でもなんでもしな。お前の殺し屋としての記録は俺が責任を持って抹殺するさ。でも、拳銃は一応持つときな。お前を知る殺し屋はいつぱいいるからな。あの女を守るためでもある。じゃあな……幸せに生きるよ」

そう言うと、父はタバコに火をつけ、タバコを吸いながら奥の部屋へと姿を消した。その父の姿は、嬉しそうでもあり、寂しそうでもあった……

そんな父の後姿を前に、クレストは静かに礼をしてその場を去った。

こうしてクレストは、殺し屋という職業から足を洗った。だがこの後、更なる出来事が起こることを、まだクレストは知る由もなかった……

## story5。 接触

クレストは、黙って組織の本部を出た後、すぐに車に乗り込み、自宅へと向かった。

そして自宅へ着き、ドアノブに手をかけた瞬間、何か不吉な予感がした。

クレストは警戒心を強め、拳銃を抜き、一気にドアを開け、靴も脱がずに玄関を通過し部屋のドアも開けた。そこにアリーナはいた。だが、その先にあつた光景にクレストは驚いた。当然である。誰かも分からない男が、アリーナの頭部に拳銃を突きつけているのだから……

「誰だお前……？　アリーナに何をしている！」

クレストは、怒りをあらわにした状態で、銃口を男に突きつけた。銃口を突きつけられた男は、少し苦笑いをした後、静かに口を開いた。

「誰だお前とは残念な話だな。アーチボルトと聞いても分からないかな？」

とてもやんわりとした口調で放たれたその男の言葉に、クレストは、驚きを隠せなかった。

「アーチボルト……僕が思うアーチボルトであれば、かつて僕の父と肩を並べた伝説の殺し屋。ロジャー・アーチボルト。まさか君は……」



クレストが恐る恐るそう言うと、その男は、また一つ笑顔を作りながら静かに口を開いた。

「そうそう。よく知ってるじゃないか。そして、君の察しの通り俺は、君の父であるアンディー・オルブライトに、殺しの依頼で死闘の末に殺されたロジャー・アーチボルトの息子のシーザー・アーチボルト。それで間違いないはないな？ クレスト・オルブライト君？」

シーザーが、その言葉を発した直後。さっきまで意味がわからなそうにしていたアリーナが、謎が解けたというような表情で口を開いた。

「やつと謎が解けたわ。あんたは、父を殺された腹いせにクレストを殺そうとしてるのね。でも、クレストを殺しても意味無いんじゃない？ 殺したのはクレストのお父さんなんだし……」

アリーナがその言葉を発すると、今度は苦笑いでもなんでもなくシーザーが笑顔を浮かべている。

そしてシーザーは、何事も無かったかのようにアリーナに銃口を突きつけるのを止め「ごめんな」といいながら、クレストの下へ行くように指をさした。

アリーナも、意味が分からないように始めは戸惑っていたが、クレストの下へ戻った。

「どういふつもりだ？」

クレストは、アリーナが戻ってきた今でもまだ警戒心を解かず、シーザーに向けて銃口を突きつけるのを止めなかった。

「どうもこうも、あんたが怒ってくれてる時点でその女性を人質にとる意味はないからな。それに俺は、別に親が殺されたからどうか興味は無い。ただ、俺の父を殺したあんたの父の息子が、どれほどの腕を持っているのか知りたいだけさ」

シーザーも、銃口のターゲットをクレストへとかえた。  
アリーナは、その光景を見てとても焦っていた。

「ちょっとやめなさいよ！ 別にクレストに恨みがないんなら戦う必要なんて無いじゃない。クレストだってほら！ 私だって無事なんだし……まずは話し合しましょうよ！」

アリーナは、二人を止めようと必死になっていると、シーザーが自分の後ろに銃を軽く投げ捨てた。直後。クレストも銃口をシーザーに突きつけるのを止めた。  
その光景を見て、アリーナは安心したように胸を撫で下ろした。

「確かに今は話し合いをしたほうがいいようだ。銃を撃つ気が無い相手にやる気は起きないさ。なあ、クレスト。なんで撃つ気がないんだ？ 多分。君の父親なら、部屋に入ってきた時点で喜んで撃つてただろうぜ？」

シーザーは、少し怒りも含んだ口調で、クレストに問いかけた。

「人を撃つのなんてもうまっぴらだ……それに、君は悪い奴じゃないとわかった。そんな君を撃つ気なんて起きやしないさ」

シーザーは、今の言葉を聞いた瞬間。袖からスピアの隠し拳銃を取り出し、クレストの頬をかすめるように銃弾を放った。

予想通り銃弾はクレストの頬をかすめ、頬から少量の血が流れた。

だが、その突然の行動にアリーナは驚いたが、クレストは微動だにしなかった。

「いきなり撃たれた銃弾から目をはなそうともしねえ……殺気が無いのを見抜き、殺気があればかわすことも出来たはずだ。父譲りの獣の血を継いでる証拠だ……でも君は、獣になりきれない獣という感じが。ならこれならどうだ。俺は今から横にいるそのアリーナという女性を撃つ。さあ、どう行動する？ 獣になりきれない獣？」

シーザーは、怒りながら言葉を発し、さっきまでは見せなかったような鋭い目つきで銃口をアリーナへ向けた。

そのシーザーの行動に、クレストは迷うことなくアリーナの前に立ち、守るように手を横に広げた。

アリーナは、クレストの行動に焦り「これじゃあんたが死んじやうでしょ！」と言い、クレストをどかそうとした。

だがクレストは、首を横に振る。

「これが僕の答えだ。僕は君を撃つ気もないし、アリーナを死なす気も無い。だから、僕が盾になっっている間にアリーナを逃がす。これなら僕が死ぬだけで話は済む……」

その言葉に、アリーナがクレストを思いっきり突き飛ばし、怒りをあらわにしながらクレストに言葉を送りつけた。

「何かっこつけてんのよ！ 私を逃がすために自分が身代わりになつて死ぬですって？ そんなの……そんなの耐えられない。死の身代わりにまでなってもらって生きるほど私の命は高くない！ だから……」

アリーナは、そう言うと、突き倒されて倒れているクレストを引

き起こし、思いっきり抱きついた。クレストは、それをはなそうとするが、思いっきり抱きついているのではなれない。」

「さあ、撃ちなさい！ これなら二人のどちらにも銃弾が貫通する。どうせ死ぬのなら二人で死ぬわ。クレストも、死ぬのが嫌なら私に言いなさい。すぐにはなすから。あんた、殺し屋辞めてきたんでしょ？ あんたの人生はこれから新しく始まるの。だから、ここで死ぬのはいけないと思う。だから、死ぬのは嫌って正直に言いな。」

「なら、君はどうなんだ？ ここで死んでもいいのか？」

シーザーが、静かにアリーナに問いかける。

アリーナは、その問いかけに対し、悩むことなく口を開いた。

「前までずっと思ってたわ。きっとこの山奥から出れる日はこないんだろうって。人に会うのなんて、私を殺しに来る奴以外に出会わないと思ってた。でも、今の状況を見てよ。確かにクレストも、元は私を殺しに来た殺し屋だけど、今は、私を人間として見てくれる……接してくれてる……自分の命を捨ててまで守ろうとしてくれる……嬉しいじゃない。こんなことあるわけないと思ってたんですもの。私だってそりゃ死にたくないわよ。でも、命を与えてくれた人に対して死で返すなんてこと……私には耐えられない。それなら私は自らの死を選ぶ……クレストは意地でも殺させない！！」

アリーナは、シーザーに向けてありったけの言葉をぶつけた。シーザーは、その言葉に対し何も答えず、ただじつと鋭い眼光を銃口の先に向けていた。

その直後である。クレストがアリーナに何か小さな声で呟いている。クレストが呟き終わると、クレストに抱きついていたアリーナがクレストからはなれた。

そしてクレストはゆつくりとアリーナの前に立ち、拳銃を抜き、銃口をシーザーに向けた。

「僕は殺し屋を辞めた。だから誰の意思でも無く全て僕の意味。初めてだよ。自分の意思で拳銃を抜いたの。それほど僕は思ってる。ここでアリーナを殺すわけにはいかない。アリーナが僕に死ぬなっと言っただから僕だって死ぬわけにはいかない。さあ、どうするシーザー。今、アリーナを守るためなら僕は君の望む獣になれる。君は、まだ僕らを狙うかい？」

クレストの目に嘘は無かった。アリーナも、そのクレストの目を見て恐怖を覚えた。それほどクレストの目は獣の目をしていたのだ。なんの躊躇も無く殺せる獣の目を……

その目を見たシーザーは、少しの沈黙の後、さっきの拳銃と同じように後ろに投げ捨て、もう抵抗しないというように手を上げ、降参の意思を表した。

その姿を見て、クレストは突きつけている拳銃を下に落とし、何もしないという意思を表した。

するとシーザーは、突然大きなため息を吐いた。

「俺の負けだな。柄にも無くびびっちまったよ。気迫に押されちゃどうやっても勝てねえわ。でも、あんたの目の獣は凄かったのに、殺される気はしなかった。まあ、勝てる気は無くしたけどな」

シーザーは、その言葉を発すると、アリーナにまた一言「ごめんな」と言い、クレストの家から立ち去ろうとした。だが、それをアリーナが止めた。

「ちょっとお茶でも飲んでいかない？」

アリーナがそう言うと、クレストも何も迷う様子も無く首を縦に振った。そんな二人を見て、シーザーは啞然としている。

「おいおい。ここで言う台詞としちゃ、もう二度と近づくな！とか、物でも投げるのが普通だぜ？　それが、茶でもいかがですか？　とはどういうこった……俺は、その女性を狙った敵だぜ？　茶なんてもらえつかよ……」

シーザーは、呆れた様子でそう言うと、また部屋から立ち去ろうとした。だが、クレストとアリーナがそれを止める。

「確かにさっきまでは敵だったけど……でも、結果的には何も無かったんだし。僕の中ではもう戦友気分だよ」

アリーナもクレストに続いて言葉を発する。

「そうよ。もしあんたが本当に悪い奴なら既に銃を撃つてると思う。しかも、なんかいちいちごめんって私に気遣ってくれてるでしょ？　敵には見えないのよ。それにさっきも言ったとおり、人とちゃんと話せるかと思ってなかったから、出来るなら贅沢に色んな人と話してみたいと思ってさ。だからお茶でもどうかと」

シーザーは、呆れたような素振りを見せたものの、少し嬉しそうな表情で返事を返し、お茶を飲んでいくことにした。

三人はそれから二時間ほどの雑談をし、楽しくやっていたのだが、急にシーザーが真面目な表情になったので会話が止まった。

そして、界限が止まった直後にシーザーが静かに口を開いた。

「ふと思ったのだが、アリーナは、急に化け物のような生物に変身しちゃうんだったよな？」

「そ…そうだけど、それがどうかしたの？」

シーザーの急な質問に、アリーナは戸惑いながらも返事を返した。

「俺の知り合いに医者がいてな。一度、君の病気を見てもらおうかなど。おっと、別に表沙汰になるような事にはならないから心配しないでくれよ。それは、保障する」

このシーザーの発言に、アリーナは興奮を隠せなかった。

「えっ！？ ちょっとそれどういうこと！！　もしかして、わたしのこの病気が治るってこと！？」

アリーナは、シーザーの胸倉をつかんで揺るようにしながら大声でそう言葉を發した。

シーザーは「一度落ち着け！」と言い、胸倉をつかんでいる手を無理やり離し、一呼吸おいた後、口を開いた。

「さあ……それはわからないが、一度診てもらって損は無いと思うが。どうする？　診てもらうか？」

シーザーの発言に、アリーナは首を縦に何度も振り「うん！」と答えた。そんなアリーナを見て、クレストも首を縦に振った。

そして、シーザーが言う医者に診てもらうことに決めた三人は、早速クレストの車に乗り込み、シーザーが言う医者がある場所に車

を進める……



## story 6。決意と選択

クレストが、シーザーの言うとおりに車を進めていると、予想通りというべきか、どんな人気の無い場所へと車は進んでいった。

クレストとアリーナが不安そうに、本当にこの道でいいのかと疑問をぶつけると、シーザーは黙って首を縦に振った。その言葉を信じて車を進めていると、いよいよ家が一つも見えなくなった。

その状況に、クレストもアリーナも不安は感じていたものの、シーザーを信じて何も言わず黙っていた。

しばらく車を進めていると、一棟の古びた病院らしき建物が見えた。シーザーがそこへ止まるように指示をし、指示通りにクレストが車を止めた。

「ここがその場所だ。見事に人気がないだろう?」

シーザーが自信満々に二人に言う。

「ほんとねえ……未だにここに医者がいるなんて信じられないわ」

アリーナが呆れたように言葉を返す。

「まあ、入ってみれば分かるじゃない? とにかく入ろう」

そして、クレストが会話を長引かせないために冷静に対処した。

三人は人気の無い不気味な病院らしき建物に足を踏み入れた。建物の中に入っても不気味で、本当にこんな場所で医者なんて勤まるのかと疑問に思っくらしいだ。

だがここで帰るわけにもいかないので、二人は黙ってシーザーに

ついていった。

「ここだ」

シーザーが立ち止まりそう言うと、ノックもせずにドアを開けた。そこには、ちゃんとした白衣を着ており、綺麗な顔立ちをしているまだ若い女性が椅子に座っていた。クレストとアリーナは心の中で、ちょっと色が汚い白衣を着ている老人を想像していたので色々な意味で驚きを隠せなかった。

「シーザー……ノックくらいして入ってきなさい。あら、お客さんがいるの。お二人さん。こんな病院に何の御用かしら？」

医者女性が二人に問いかけた。

その問いかけにアリーナが答えにくそうにしていたので、クレストがアリーナの病気を説明した。

「そうなの……それは表の病院じゃ言えないわねえ。その病気なら治す方法は一つあるわ。でも……」

「えっ！ 治す方法があるんですか！？ 私の病気治るんですか！？」

アリーナが興奮を抑えきれない様子で医者女性の女性に問いかけた。だが、医者女性の女性アリーナの病気を治す方法をとて言いにくそうな表情をしている。

「喜ぶのはまだ早い。この病気を治しに来た人はあなただけじゃないわ。あなた以外の人も治す方法があると知ったときは同じように喜んでた。でも……まだいないのよ。治った人がね。治るのは間

違う。でも、誰も耐えられなかったのよ」

医者の女性が、ちょっと冷や汗を流しながらアリーナにそう伝えた。

「私耐えます！　どんなことでも耐えます！　だから治る方法を教えてください。この病気が治る程の苦痛なんて考えられないんですもの。お願いします！」

アリーナは、医者の女性に頭を下げて頼んだ。医者女性は、そんなアリーナの方へゆっくりと近づき、アリーナの上にゆっくりと手を置き頭を撫でた。

「そうね。あなたなら耐えられると思う。でもね、耐えるのはあなたじゃないの。あなたと一緒に来ているあの男性なの」

医者女性のその言葉に、アリーナは動揺しながら「えっ……それどういことですか？」と聞いた。医者女性は、その問いかけに丁寧に答えた。

医者女性が言った言葉をまとめると、アリーナの血の中には化け物になる成分をもった血が少し含まれていて、その血が脳におくられるときに変身してしまうのだという。しかし、その血は感染者以外の空気が体に入るのを嫌い、逃げてしまうので症状がおさまる。なのでその血を全て脳に集め、いつもより強大な力を持つ化け物となる感染者から、その血を吸い出してしまおうという考えだ。なので、危険な目にあうのは吸い出す役のカレストというわけだ。

「先生。そんなこと出来るんですか？　普通に聞いてたらありえないような話なんですけど……」

クレストが不安そうに医者の女性に聞く。

「ええ。まあ、私は裏医者のようなもんだからそんなことくらいしか出来ないんだけどね。それよりもアリーナさん。どうする？やるんなら今からでも手術に取り掛かるけど」

医者 of 女性が真剣な眼差しをアリーナに向けながら問う。

「やっぱりやりません」

アリーナは医者 of 目をじっと見ながらそう言った。

「クレストにはこれ以上迷惑をかけるわけには……」

「いいえ。やります！」

アリーナが喋っている声を掻き消すような大きな声でクレストが叫んだ。

「僕の人生なんて殺し屋で始まり殺し屋で終わると思ってました。でも、アリーナのおかげで殺し屋も辞めることができ、人生に光が見えてます。だから今度は僕がアリーナの人生を変える番なんです。だからやらせてください！」

クレストが医者 of 女性に深々と頭を下げた。医者 of 女性は、表情一つ変えずにクレストに問いをだす。

「あなたの決意は分かったわ。でも、あなたが諦めると誰もアリーナさんを止められなくなつてアリーナさんは死んでしまうわ。あな

たにアリーナさんのために死ぬ覚悟はある？ それくらいの覚悟がないと本当にアリーナさんは死んじゃうのよ」

クレストは、何の迷いもなく「あります」と答えた。その表情には嘘なんてカケラもみえなかった。医者の女性もそれ以上クレストに何も言わなかった。でも、アリーナはそれに納得のいかない様子だった。

「何言ってるのよ！ 死んじゃうのよ？ 一歩間違えれば死んじゃうのよ？ 私のために死ぬなんてやめてよ。気持ちは嬉しいけどさ……クレストが死んじゃうなんてやだよ……」

アリーナの目から涙がこぼれた。そして、アリーナの中にある本音も一緒にこぼれた。クレストは、そんなアリーナを見て、ただ一言笑顔で「大丈夫。僕を信じて」と言った。アリーナはクレストのその表情を見て、何も言えず、ただ涙だけが溢れていた。

「分かったわ。やりましょう。その決意を変えるのはどれだけ経っても無理そうだしね。手術室に案内するわ。ついてきなさい」

医者の女性はそう言ったが、顔はなんだか不安そうな顔をしていた。そして、その表情のまま手術室へと足を進めようとした。だがそれを、さっきまで何も言わず話を聞いていたシーザーが止めた。

「ちょっと待てよミーシャ。そんな不安そうな顔のまま手術できるのか？ そりゃ今まで成功したことがないんだ。不安なのは分かるよ。でも、クレストの決意を見ただろう？ 殺し屋としてトップクラスの俺を凌駕するクレストが本気になるんだ。もうちょっと自身もった顔してもいいんじゃないか？」

シーザーが、ミーシャの表情をじつと見ながらそう言葉を発した。

「クレスト君を疑ってるわけじゃないわ……私だって人が死ぬのを見るのが嫌なのよ。大きな決意を持った人たちが死ぬのを沢山見てきたわ。化け物になった自分が、助けようとしてくれる人を殺すのよ？ その苦しさあなたにはわからないでしょ？ 私だって嫌なのよ。希望から絶望に変わる瞬間を見るのがね」

さっきまでのミーシャとは違い、ムキになった表情でシーザーの問いを返した。

「なら、俺もクレストと一緒にやるってならどうする？」

そう言いながらシーザーがゆっくりとミーシャ達の方へ歩く。そして、クレストの肩に手をポンと乗せた。ミーシャは、シーザーの発言に驚きを隠せなかった。

「何を言っているのシーザー。今は、かっこつけてる場合じゃないのよ？」

ミーシャは、焦りながらそうシーザーに問いをだした。すると、シーザーの目が急に真剣な表情になり、ミーシャの目を見つめながら言葉を返した。

「かっこつけてなんていないさ。俺だけ見てるだけってのも嫌だしな。クレスト達を見殺しにするのは後味悪い。それに、俺はミーシャに絶望なんて見せたくないし。とにかくその表情はやめようぜ。みんな不安になっちまう。心配すんなって、俺とクレストが組むんだ。大怪獣が襲ってきても勝てるさ」

シーザーがそう言うと、場の雰囲気が変わり始めてきた。ミーシヤの不安も少し消えたのか、顔から不安の表情が消えた。クレストも素直にシーザーが加わってくれることを喜び、アリーナも涙は消え、小さい声で「ありがとう」と呟いた。

そして彼らは手術室へと足を進めた。

## last story. ヨーイ スタート

手術室に入った後、ミーシャがクレストとシーザーに注射器を渡した。

この注射器は特別なもので、注射した場所の血を瞬間的に採取することが出来る。なのでクレストかシーザーのどちらかが血が脳に集まって化け物となっているアリーナの脳にその注射器を刺せばいいというわけだ。

その後アリーナを寝台に寝かせ、ミーシャがアリーナの脳に血を集める。するとアリーナがああのように発狂を始めた……

「シーザー！ 早くあそこへ運ぶわよ」

ミーシャとシーザーが発狂して化け物へと変身しようとしているアリーナをどこかへ運び始めた。クレストは黙ってその後ろをついていく。

ミーシャとシーザーが向かった場所は、病院の目立たないところにある部屋だった。

中に入るとそこは物一つない広々とした部屋だ。ミーシャは「ここなら思う存分戦えるわ。クレスト。シーザー。生きて……生きて戻ってくるのよ」とだけ言い部屋には入らなかった。

部屋の中に入ったクレストとシーザーは、発狂しながら化け物へと変身していくアリーナの姿をじっと見詰めている。

するとアリーナがとても大きな声で奇声をあげた。それと同時にクレストとシーザーも注射器を取り出す。命を懸けた戦いの始まりである。



まず二人は二手にわかれ様子を見る。だが、そんなことはお構い無しにアリーナは切り裂こうと近づく。切り裂くターゲットはシーザーに決めたようだ。

この瞬間。アイコンタクトによる合図でシーザーが囃役に決定する。長く伸びた爪でシーザーを切り裂こうとした瞬間にクレストがすかさず注射器をアリーナの脳に刺すのだ。

予定通りアリーナがシーザーを爪で切り裂こうとする。その瞬間にクレストがアリーナの脳に注射器を刺そうと一気に駆け寄る。

だが、アリーナは野生の勘なのか、切り裂こうとしている爪を止めクレストの方に素早く振り向き蹴り飛ばした。

クレストは吹っ飛び、遠くにある壁に当たった。それほどの威力があるということである。壁に当たったクレストは吐血し、壁にもたれてぐったりとしている。

その瞬間。クレストに気を取られているアリーナを見てチャンスと思ったシーザーはすかさずアリーナに飛び掛った。だが、それも軽くあしらわれる。

シーザーは一度距離をとり、ぐったりとしているクレストの所へ向かった。

「大丈夫かクレスト！」

シーザーがクレストの体を揺さぶりそう言う。

「うん……なんか。肋骨は何本か折れちゃってるみたいけど。それよりもどうする？ 多分、普通にやったんじゃ間違いない死ぬ。」

ほら、あちらさんは余裕綽々みたいだし」

前を見ると、アリーナがゆっくりと二人の下へ近づいてくる。そのゆっくりと近づいてくる姿は確かに余裕すら感じられる。

「そうだな……これはもう抜くしかないか。なあクレスト」

「そうだね。殺さない程度に」

そう言うと二人は拳銃を抜いた。そして二人別々の場所へ散らばる。

アリーナもこれには何か危険を感じたのか、一気に警戒心を強めた。

まず二人が試しにアリーナがどういう行動をするのか調べるために銃弾を一発ずつ撃つ。アリーナのたった行動は銃弾を爪で切り裂くという行動だった。

その瞬間。アリーナがニタニタと不気味な笑顔を作るとクレストの下へ全速力で突っ込んできた。

シーザーはアリーナが背を向けた瞬間をチャンスと感じ、瞬時にアリーナの急所を外しクレストに銃弾が当たらない全ての場所に銃弾を発砲した。

だが、アリーナは後ろを振り向くことなく、シーザーが撃った全ての銃弾を全て片腕だけで切り裂いた。それはまるで後ろに目があるように正確であった。

それにはシーザーも「こんなんありかよ……」と思わず呟いてしまった。

アリーナは何事も無かったかのようにクレストに突っ込むと、思いつきクレストに爪を突き刺した。

クレストもそれをギリギリでかわす。

かわしたその時である。クレストが急に何か思いついたような顔をした。

「そうだ。そうだよ。あるじゃないかとおきの方法。初めからこうするべきだった」

クレストはそう呟くと銃を後ろへ放り投げた。クレストはそのままその場所を動かない。

シーザーもクレストに「何をしてる！」と叫んだ。

アリーナはそんなクレストを見て、またニタツツと笑うと、さっきと同じように爪を突き刺そうとする構えをとった。

それでもクレストは動こうともかわそうともしない。

シーザーは頭で考えた行動なのか、直感で動いた行動なのかは定かではないが「馬鹿野郎！」と叫ぶと同時に自分の持っている拳銃を思いつき放り投げた。

その拳銃はアリーナがクレストを勢いよく爪で突き刺そうとしているその場所に丁度うまく入り込み、爪と拳銃が重なった。それは正にクレストを守る盾のようであった。

だが、その行動も無駄な足掻きであった。アリーナの爪が拳銃を貫いたのである。これにはシーザーもがっくりと膝を落とした。

そして、その爪は同時にクレストも貫いた。

爪をクレストに突き刺したアリーナはキヤキヤキヤと不気味な声で笑った。だが、その声はすぐに止まった。刺されて苦しんでいるはずのクレストは笑っているのだ。それも満面の笑みで……

クレストは満面の笑みのままで注射器を取り出すと、それをアリーナの脳へ刺し、血を吸い出した。

その瞬間。化け物の姿から少しずつ元のアリーナの姿へ戻った。アリーナは気を失っているようだ。クレストを突き刺している長い爪も次第に元の長さに戻っていき、爪はクレストから離れる。クレストはその場に倒れこんだ。もう動く力もないようである。

遠くにいたシーザーは、重症であるクレストの方へ駆け寄る。

「大丈夫かクレスト！　しっかりしろ！」

クレストはゆっくりとシーザーの方に振り向いた。

「うん……君の投げた拳銃のおかげなのかな、急所は外してるよ……でもよかったあ。これでアリーナはもう悩まないですむんだよね。病気に怯えることなく色んな人と接する事が出来るんだ……本当よかったあ」

クレストはそう言うのと気を失った。シーザーはこれはまずいと感じたのか、全速力でミーシャを呼びに向かった。

すぐに二人はミーシャの医療室へ運ばれた。ミーシャは専門業は裏に関する医療だが、ただ、ミーシャが普通の医療は嫌いなのでしていないだけであり普通の医療に関しても一流なのである。

検査によるとクレストは心停止。仮死状態のようなもので、とても危険な状況である。アリーナは運ばれる最中に意識を取り戻した。今はシーザーと共に医療室の外で待っている。

「私のせいだ……私がクレストを……私のせいだ……」

アリーナは泣き崩れながらずっと同じような言葉を呟いている。隣にいるシーザーはただ黙っていた。

それから五分程経過した。アリーナはまだ泣き崩れながら言葉を呟いている。シーザーはようやく口を開いた。

「なあ。君は変身してたときのこと覚えてるか？」

突如質問されたアリーナだが、一つも体を動かさずに「覚えてない……」と答えた。

「そっか。あいつな。笑ってたんだよ。君に爪を突き刺されて笑ってたんだ。満面の笑みでね。その理由がさ。これで君を元通りの姿に戻せる。そうすれば君は悩まないですむし人と接することも出来るだろうって。最後まで君のことしか頭に無かったんだクレストは。そんな風に思われるなんて幸せなことだと思う。でも、君が今そうして落ち込んでいるとクレストも元氣無くすさ。胸張って生き返れないさ。そうならないためにこういふときはどうするべきだい？」

そう問われたアリーナは必死で涙を止めてシーザーの方に頑張って作った笑顔で振り向いた。

「そうね。私が泣いてどうするのよ……クレストは私のために命をかけてくれたんだもの。それに泣いて落ち込んで答えるのは失礼だね。私、笑顔で待つ！ 笑顔でクレストを待つ！ それが今の私の

出来る最大限の事だもの。クレストを泣き顔で迎えるわけにはいかない。笑い顔で迎えるわ！」

そう無理やりでも意気込んでいるアリーナを見て、シーザーは、もう何も言うことは無いというような顔をしてまた黙った。

それから五年の月日が流れた。ミーシャはシーザーと結婚し、一緒に経営を営んでいる。そこに二人の客人が訪れた。

「あら、久しぶりね。今日はどうしたの？」

ミーシャがその客人二人を見て親しげに話しかける。

「お久しぶりです。今日はちょっと伝えたいことがありますて」

客人の一人がそう言うのと、もう一人の客人が照れ気味に伝えた後、軽くお辞儀をしてその場を去った。

「あいつらもいよいよか。思ったよりも長かったな」

「そうね。でも、憎いくらい幸せそうねあの二人」

「おいおい。なら俺達は幸せじゃないってのかよ」

「当時は私もそう思ったわよ。でも、今となっちゃ疲れるだけって感じがしら」

ミーシャは、少し間をとってシーザーのほうへ振り向いた。

「まっ、そんなことはどうでもいいじゃない。さあ。今から大変よ

！ 色々やることが増えたわ。今日は病院休みにして準備しましょ準備」

「おう。急に元気出しゃがって疲れるぜ全く。でも、俺も今日はそんな気分だ。盛大に準備してやるぜ！ なんとって俺達の親友の結婚式だもんな」

「ええ。それにしてもまさかこんなことになるとは思わなかったわ。表社会に出れるはずも無い境遇にあった二人がこうして結ばれちゃってるんですもの。あつ、それは私んとも同じか」

ミーシャは笑いながらそう言った。シーザーも笑いながら「それもそうだな」と返す。

彼らはスタートの位置に立った。だが、ただのスタートではない。マイナスからスタートまで這い上がってきたのスタートだ。これから彼らにスタートの弾丸が発砲される。これは、普通の人にとっては当たり前のことだ。だが、彼らにとっては幸せの発砲。今までドロドロの道を進んできた彼らにしかわからない幸せの瞬間。

位置について。ヨーイ スタート。

## last story. ヨーイ スタート（後書き）

初めての長編小説完結です！（長編でもないか）

本当はもっとドロドロな終わりにする予定だったんですが、書いてるうちになんだかドロドロにするのに抵抗が出来て、結局ハッピーエンドっぽくなっちゃいました（汗）

本当にここまで読んでくださった方には感謝の極みです。ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2011d/>

---

殺し屋と身体異変者

2010年10月10日18時29分発行